

大学と宗教という主題は、前近代的なものが近代的なものに、どのように接続したのかという問題である。思想の問題で言えば、明治初頭において、東洋思想が「近代」という思考に如何に接続したのかを問う。言い換えれば、日本人が西欧の思想、つまり、哲学を理解することが可能だったのかという疑いである。したがって、問題は二重の構造を示す。一つめは、西欧化Ⅱ近代化であるのか否か。二つめの問題は、そのような枠組みの違いがあるのであれば、そもそも日本人が理解した哲学は「本当」に西洋の哲学であったのかという問題である。

哲学を日本に最初に紹介した人物は西周であるが、儒教の枠組みで理解していた。したがって、哲学用語は儒教の枠組みを通して創案された。この理解は、日本哲学史上で重要な意味をもつことになる。なぜなら、儒教と哲学を同等のものと見做していたからこそ、西以降においても儒教・仏教を東洋の「哲学」という枠組みで語る発想が誕生したからである。西洋哲学に対する「東洋哲学」という範疇の誕生である。

西周を通して確認した西洋「哲学」と東洋「哲学」であるが、両者に通底する「哲学」なるものとは何かが問題となる。そして、この問題は東洋思想を近代の中で位置づけるためには「哲学」の枠組みの中で語らねばならないというルールが敷かれたことを意味している。しかも、「折衷主義」とそれ以降という区分が認識されないまま、西洋と東洋を包括する抽象的な「哲学」なるものが想定され、「哲学」の「用語」が東西の思想をつなげる共通言語と理解されるに至ったと考えられる。

共通言語としての哲学を問題にするには、はじめに、前提とする問題の枠組みがある。それは、異なる二つの文化が断絶したものととして想定しなければならぬことである。それが、記号化された東洋と西洋という文化がそれにあたる。この両者が素朴に翻訳可能性を持っていると考えるのであれば何も問題は生じない。したがって、哲学が普遍性を有しているのか否かで、二つモデルが想定される。一つ目は、哲学が普遍性を有しているモデルであり、普遍性を有している以上、何も問題は起きない。二つ目は、哲学が普遍性を有していないモデルであり、このモデルでは両文化間の影響関係こそ認めるものの理解や翻訳可能性は認められない。いわば、文化相対主義を想定したものである。日本における哲学の誕生や近代化は、西洋に触発されて生まれたが、実は、あくまでも、日本で登場した〈哲学〉〈近代化〉に過ぎず西洋の哲学とは同一ではないという理解である。前者は楽観的すぎる。むしろ、どこかで異文化とは分かりあえていないという実感を踏まえ、異文化間の影響関係を認めた上で、両者が相互に理解したつもりでいるものの、その理解は微妙にずれたものになってしまっていると捉えたい。

そして、さらなる変化を日本の思想において〈哲学〉はもたらした。それは〈哲学〉が誕生した以上、哲学と向き合う形で東洋思想が再確認された経緯にある。西洋との対比でもって東洋を自覚し、営まれ再構築された東洋思想は、哲学のバイアスのかかった東洋思想に他ならない。したがって、西洋と東洋という対比は、東洋思想においても、共通言語としての哲学によって内省が可能となる。したがって、哲学における普遍性の有無に関係なく、「哲学」が東洋思想と西洋哲学の共通言語として機能しているという結論が導き出せるのである。